

令和6年度「全国学力・学習状況調査」の結果 ー分析から見てきた成果・課題と今後の取組についてー

区 名 平野区

学 校 名 瓜破小学校

学校長名 谷本 隆

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和6年4月18日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・瓜破小学校では、第6学年 48名

令和6年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語・算数ともに平均正答率で全国を下回った。国語科は15.7pt、算数科は13.4pt下回る結果となった。領域別では、国語科では「言葉の特徴」「話すこと・聞くこと」についてが差が大きく20pt低かった。算数科ではすべての領域で2桁以上下回っており、特に「データの活用」では15pt下回った。なお、全国比との正答数の差は2.3問（国語）、2.1問（算数）であった。

分析から見てきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕 対全国比でみて0.77pt（昨年度：0.85pt）であり、経年では-0.8ptとなった。大きく差があった部分は「目的や意図に応じて、内容を検討する」「漢字を正しく使う」「主語の関係を捉える」の項目であり基礎的な部分で課題が見られた。

〔算数〕 対全国比でみて0.79pt（昨年度：0.75pt）であり、経年では+0.5ptとなった。大きく差が開いたのは「数量の関係を捉え、式に表す」部分で式の関係性を読み取る部分であり国語同様に基礎的な部分で課題が見られた。

国語、算数ともに基礎的な力に課題があることがわかる。学びサポーターを活用した授業への入り込みや放課後学習等、学力向上に向けた取組を続けており、経年的にみると研究教科である算数に関しては全国比で改善が見られる。また平均無解答率も国語1.7（全国4.2）算数0.9（全国3.4）となっており、テストに臨む姿勢は良い傾向に向かっていることが推察される。

質問調査より

「33. 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」（89.1）でも全国平均を上回るようになり、対話的に学びを深められるような授業改善をしてきたことにより児童の意識も向上してきている。また本校は「13. いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」（89.6→93.1→97.8）の項目での意識の向上を以前から目指してきており、経年的に上昇している。全国平均でも上回っており、日頃の児童の様子から、他者に対する優しさや思いやり、認め合う心が育っていることがうかがえる。

今後の取組(アクションプラン)

結果の概要でも述べたように、全国との正答数の差は2問強、平均無解答率は国語1.7（全国4.2）算数0.9（全国3.4）であった。また「児童は、授業中の私語が少なく、落ち着いている」。以上のことから児童は学習に対して意欲的に取り組むようになっているといえる。さらに教職員も授業改善に取り組み続けている。学びコラボレーター、学びサポーターなど、大阪市の様々な施策を生かし、授業の充実や放課後学習に取り組みながら、基礎基本を中心とした児童の学力向上に取り組みたい。その上で、保護者、地域、学校が協力して、学校グランドデザインに示しているように児童にとって「学校が安心し、心満たされる居場所」になることを目指す。